

国立国会図書館



政治談話録音の50年

国立国会図書館 建築の歩み

2012.4
No. 613

国立国会図書館利用案内

東京本館

所在地 〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号 03(3581)2331
利用案内 03(3506)3300(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間	月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は17:00までです。	即日複写受付	月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00
資料請求受付★	月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室および古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。	後日郵送複写受付★	月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30

★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館 利用者サービス部 サービス運営課 03(3581)2331 内線25211

関西館

所在地 〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号 0774(98)1200(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間	月～土曜日 10:00～18:00	即日複写受付	月～土曜日 10:00～17:00
資料請求受付★	月～土曜日 10:00～17:15	後日郵送複写受付★	月～土曜日 10:00～17:45
セルフ複写受付	月～土曜日 10:00～17:30	★登録利用者限定のサービスです。	

■見学のお申込み／国立国会図書館 関西館 総務課 0774(98)1224 [直通]

国際子ども図書館

所在地 〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電話番号 03(3827)2053
利用案内 03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
利用できる人 どなたでも利用できます(ただし第一・第二資料室は満18歳以上の方)。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料 国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間	火～日曜日 9:30～17:00	※1階子どものへや、世界を知るへやおよび3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。		
第一・第二資料室の利用時間	閲覧時間	火～土曜日 9:30～17:00	資料請求受付	火～土曜日 9:30～16:30
複写サービス時間	即日複写受付	火～日曜日 10:00～16:00	後日郵送複写受付	火～日曜日 10:00～16:30
	複写製品引渡し	火～日曜日 10:30～12:00 13:00～16:30		

■見学のお申込み／国立国会図書館 国際子ども図書館 03(3827)2053 [代表]

02 川村清雄 作品と其人物 画家への傾倒が書かせた本
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から

04 政治談話録音の50年

12 国立国会図書館 建築の歩み

18 国会と国民とをつなぐ 「国会関連情報」のページ

21 さがすヒント 国立国会図書館サーチ、NDL-OPACの使い方

22 本の森を歩く 第9回 英国を魅了した日本

17 館内スコープ

職員採用のための地道な日々

27 本屋にない本

○『瀬戸内の港町ゆかりの看板・引札展 ユニークで滑稽な広告文化 二〇一〇（平成二十二）年特別展』

28 NDL NEWS

- 新館長就任
- 第22回納本制度審議会
- 第8回レファレンス協同データベースフォーラム
- おもな人事

32 お知らせ

- 調査資料『国による研究開発の推進』『東日本大震災への政策対応と諸課題』を刊行しました
- 国際子ども図書館講演会「読者としての子どもたち—発達と読書、読書の発達—」
- 平成24年度の図書館員を対象とする研修
- 新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物

国立国会図書館の蔵書から

川村清雄 作品と其人物

画家への傾倒が書かせた本

藤田 壮介

「川村清雄」を知っていますか？——平成17年、目黒区美術館でこう題した展覧会が開催されました。さて、本誌をお読みの皆様は、川村清雄という洋画家をご存知でしょうか。

川村清雄（1852 - 1934）（写真1）は、御庭番を務めた幕臣の家系に生まれました。高橋由一からは一世代ほど下りますが、浅井忠や黒田清輝らよりは早い生まれです。明治4（1871）年には、静岡に移った徳川家の給費生としてヨーロッパに留学しています。パリのサロンで日本人として初入選を果たす五姓田義松にも先行する、かなり早い時期の留学といえるでしょう。明治14（1881）年にかけてフランス、イタリアで絵画を学び、帰国。「ヴェニス風景」（写真2）「形見の直垂」「振天府」などの作品をのこしています。

今回紹介する本（写真4～7）は、清雄の作画姿勢に感嘆した海軍技師木村駿吉（写真3）が、世間から忘れられつつあった彼の事跡を後世に伝えるために執筆したものです。木村は美術の専門家ではありませんが、「素人の画論」と自称しながらも、種々の書物を援用し、清雄の絵のすばらしさを熱っぽくうたいあげます。画題のために故実の調査や家禽の飼育など徹底した探求を行い、多様な技法で描き分ける清雄に、「^{あつか}恰も多種多様の専門画家を一人に集めた様な人」と賛辞を惜しみません（写真7）。その清雄が画壇で正当に評価されないことで、「日本の油画は技術に於ても自覚に於ても何十年か遅れた」とも書きます。全篇、木村の清雄に対する強い思い入れを感じます。

本書が刊行されたのは大正15（1926）年の12月、清雄存命中のことです。「はしがき」に「差当り鉄筆謄写版で

百部だけ印刷し、非売品として希望に依て、川村画伯の作品を所蔵珍重する同趣味の人々に頒^{わか}つ積り」とあるように、市販はされず、限られた読者のみが手に入れることができました。国立国会図書館が所蔵する本は、「壺百部ノ内第無号」という扱いで（写真6）、検閲のため内務省に納められた本が引き継がれたものです。

この本がどのような人々の手に渡ったのか、知りえたものを表にまとめました（次頁）。図書館に納められたものもありますが、多くは個人に献呈されたと思われ、所在を確認できたのはごくわずかです。ただこれだけでも、清雄と木村を取り巻く人間関係の一部がうかがえます。

遅くとも昭和7（1932）年の時点で、木村の手元には余部がなく*、百部すべてがいずれかの人の手に渡っていたと思われま。刊行から90年近くが経ち、失われてしまったものもあるでしょうが、これら以外の本が誰に届けられたのか、興味をかきたてられます。

木村の熱意によって生まれた本書は、内容もさることながら、一冊一冊の行方から垣間見える人間関係という面でも、興味深い情報を我々に残してくれています。

今年、平成24年10月には、東京都江戸東京博物館、目黒区美術館で、川村清雄の展覧会があるようです（江戸東京博物館の展示は、来年2月に静岡県立美術館に巡回）。木村に筆をとらせた作品に接してみたいかがでしょうか。

（ふじた そうすけ 利用者サービス部政治史料課）

*北海道大学附属図書館所蔵本（本書の草稿段階のもの）に添付されている、「高岡教授」あて木村駿吉書簡に「右は僅に百部謄写、今日にては最早一部も残り不申」とある。



写真1



写真4



写真5

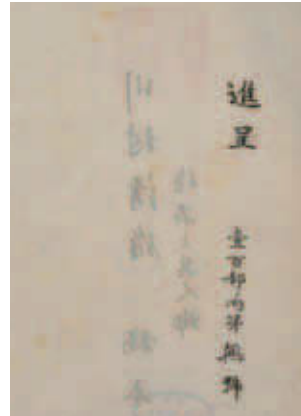


写真6



写真2

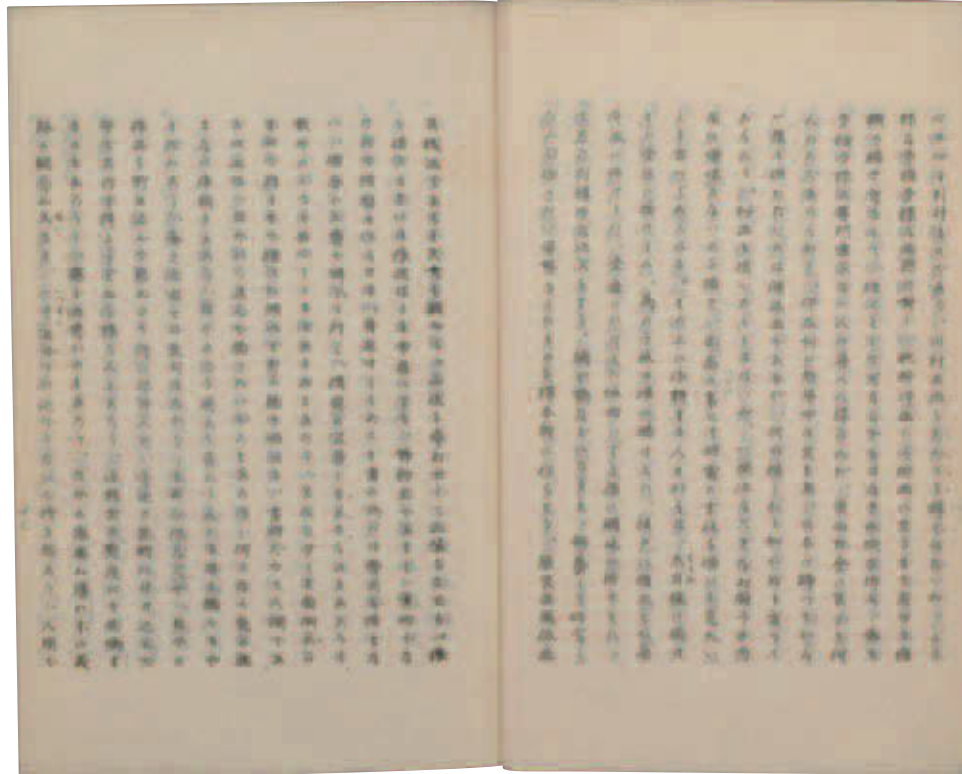


写真7



写真3

写真1 川村清雄肖像(東京都江戸東京博物館所蔵)
留学から帰った直後。美男と評判であった。
写真2 「ヴェニス風景」 笠間日動美術館蔵
写真3 著者の木村駿吉肖像(『日本無線55年の歩み』日本無線株式会社 1971年刊 口絵)
幕臣木村芥舟の三男として生まれ、海軍技師として艦船用無線電信機の発明に貢献した。
写真4~6 『川村清雄』表紙、標題紙、標題紙裏
写真7 『川村清雄』48丁裏~49丁表 「恰も…」の表現は3~4行目。

号数	献呈先(表記のとおり)	現所在
無	—	国立国会図書館
11	尾形正弥 (清雄の知己で支援者。次女が清雄の長男に嫁ぐ)	東京都江戸東京博物館
20	今村繁三 (当時の洋画界では有名なパトロン)	静岡県立美術館
22	吉益耳童 (清雄の弟子の洋画家)	東京都江戸東京博物館
25	伊原青々園 (劇作家伊原敏郎の筆名。清雄の聞き書きが載る『唾玉集』の編者)	神奈川近代美術館 (東京大学駒場図書館で複製を所蔵)
43	東京帝国大学図書館	東京大学附属図書館
45	慶應大学図書館	慶應義塾図書館
46	早稲田大学図書館	早稲田大学図書館
48	大橋図書館	三康図書館
49	大阪市立図書館	大阪府立中之島図書館
68	三宅克己 (水彩画家。日本における水彩画の普及に尽力)	静岡県立美術館(複製)
81	溝口清次郎	東京国立博物館

川村清雄：作品と其人物 / 木村駿吉 著

東京：木村駿吉，大正15（1926）年。

157丁；27cm <請求記号 175-82>

※平成24年5月末にインターネットを通じてデジタル画像が閲覧可能となる予定。

本稿の執筆にあたり、東京都江戸東京博物館、大阪府立中之島図書館、静岡県立美術館、北海道大学附属図書館の方々にご協力、ご示唆を賜りました。感謝申し上げます。

『川村清雄』献呈先と現在の所在



鈴木茂三郎（右）の談話聴取（1966年） 左は質問者の伊藤隆、中央は河野義克国立国会図書館長（当時）

政治談話録音の50年

堀内 寛雄

はじめに

平成24年1月東京本館憲政資料室において、「藤山愛一郎政治談話録音」を公開した¹。国立国会図書館は、戦前から戦後にかけての政治史上で重要な役割を果たした人物から、文書では後世に残しにくい証言を聴取する目的で、昭和36（1961）年から昭和62（1987）年まで、計10人を対象に「政治談話録音」を実施し、順次公開してきた²。今回の藤山録音の公開をもって、10人の「政治談話録音」はすべて公開されたことになる。

第1回の「町野武馬政治談話録音」が平成3年に公開されてから20年余の月日が経過したが、筆者はこの間、一連の談話録音の公開作業の大半に携

わってきた。本稿では、主にこの20年間の各録音の公開経緯を中心に回顧し、あらためて「政治談話録音」の意義を検証することとしたい（以下敬称略）。

沿革——企画・対象者など

「政治談話録音」の企画は、昭和35（1960）年、作家で元参議院議員の山本有三の提案に始まる。山本は当時、旧制一高時代の同窓だった近衛文麿元首相の伝記を執筆することをライフワークとしており、精力的に資料収集を行っていた。山本は国立国会図書館に対して、「文書にできないような政治史の裏事情について、特に第二次世界大戦の経緯に精通している人物の談話を録音して保管

してはどうか」という旨の提案を行った。当館は、これに対応して「政治史料収集整備計画」を策定し、当時すでに収集していた明治・大正期までの資料に加え、以後現在に至るまでの政治家・官僚・軍人・学界・財界人等が所蔵する日記・メモ・書簡のほか、映像・音声資料を収集する方針を定めた。この計画を受けて設置された政治史料調査事務局が、第1回の「政治談話録音」実施の準備作業を担うこととなった。最初の談話者は、戦前に中国東北部の軍閥である張作霖の顧問であった町野武馬と決まり、昭和36年5月に湯河原の町野邸において録音を

実施した。聞き手は、山本有三のほか、近衛のプレーンで昭和研究会を主宰した後藤隆之助、当館からは中国問題の専門家である古田時夫が出席した。

以後、昭和62年までの間、表1の10人の人物への談話聴取が続けられた。談話者の候補として挙がったが実現に至らなかった人物としては、吉田茂、片山哲、石橋湛山、岸信介などの元首相のほか、清瀬一郎、大野伴睦、西尾末広、河上丈太郎などの与野党大物政治家、鈴木貞一、荒木貞夫、野村吉三郎などの軍人、有田八郎、芳澤謙吉などの外交官がいる。

談話者	テーマ	総録音時間	収録年月日	おもな質問者	公開時期
町野武馬 (まちの たけま 1875-1968) 陸軍大佐、張作霖顧問	張作霖爆死事件	6時間	①1961年5月14日 ②1961年5月15日	山本有三 (元参議院議員、作家) 後藤隆之助 (元昭和研究会主宰者) 古田時夫 (国立国会図書館)	1991年6月
牟田口廉也 (むたぐち れんや 1888-1966) 陸軍中将、歩兵第1連隊長 (盧溝橋事件勃発時)、 第15軍司令官 (インパール作戦指揮)	盧溝橋事件 インパール作戦	4.5時間	①1963年4月23日 ②1965年2月18日	山本有三 (①のみ)	①1993年5月 ②1995年12月
今村均 (いまむら ひとし 1886-1968) 陸軍大将、陸軍省兵務局長、第16軍司令官 (ジャワ作戦指揮)	陸軍軍制等	3.5時間	①1964年12月 ②1965年1月	今井清一 (横浜市立大学助教授) 藤田嗣雄 (上智大学教授)	1995年2月
鈴木茂三郎 (すずき もさぶろう 1893-1970) 衆議院議員、日本無産党書記長、日本社会党委員長	戦前の社会主義運動等	12時間	①1966年12月8日 ②1966年12月14日 ③1966年12月16日 ④1966年12月22日	伊藤隆 (東京大学社会科学研究所講師)	1997年2月
木戸幸一 (きど こういち 1889-1977) 内大臣府秘書官長、第1次近衛内閣文相・厚相、 平沼内閣内相、内大臣	「木戸日記」に関連した秘史等	17時間	①1967年2月16日 ②1967年3月6日 ③1967年3月13日 ④1967年3月27日 ⑤1967年4月12日 ⑥1967年5月29日	大久保利謙 (早稲田大学・立教大学講師) 後藤隆之助 山本有三	1997年6月
迫水久常 (さこみず ひさつね 1902-1977) 岡田首相秘書官、鈴木貞太郎内閣書記官長	終戦関係 2.26事件等	4.5時間	①1969年11月7日 ②1972年10月4日	河野義克 (国立国会図書館長、 東京市政調査会理事長)	①1999年11月 ②2002年11月
賀屋興宣 (かや おきのり 1889-1977) 第1次近衛内閣蔵相、東条内閣蔵相	戦前の財政政策等	11時間	①1975年11月11日 ②1975年11月18日 ③1975年11月27日 ④1975年12月5日 ⑤1975年12月11日 ⑥1975年12月17日	有竹修二 (朝日新聞社客員評論家) 河原宏 (早稲田大学教授) 鹿嶋清一 (元毎日新聞記者) 平田敬一郎 (元大蔵事務次官)	2006年1月
市川房枝 (いちかわ ふさえ 1893-1981) 女性運動家、参議院議員	婦人参政権獲得運動、 婦人と政治等	6時間	①1978年3月29日 ②1978年5月19日	児玉勝子 (婦選会館常務理事) 山口美代子 (国立国会図書館)	2006年1月
藤山愛一郎 (ふじやま あいichirou 1897-1985) 東商・日商會頭、岸内閣外相、第2次池田・第1次 佐藤内閣経済企画庁長官	東条内閣倒閣運動、 日中関係等	6時間	①1981年11月12日 ②1981年12月3日 ③1981年12月10日 ④1981年12月21日	遠藤勝巳 (共同通信社総務局長)	2012年1月
勝間田清一 (かつまた せいいち 1908-1989) 日本社会党委員長、衆議院副議長	企画院事件、日本 社会党分裂・統一 等	9時間	①1987年11月17日 ②1987年11月18日 ③1987年11月19日	岸本弘一 (国立国会図書館専門調査員)	1997年11月

表1 政治談話録音一覧 (平成24年2月現在)

1 「『藤山愛一郎政治談話録音』を公開しました」『国立国会図書館月報』(611) 2012.2 p.30 (http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3483377_po_geppol202.pdf?contentNo=1)

2 政治談話録音の取組みの経緯等については、二宮三郎「政治史料調査事務局沿革」に詳しい。『参考書誌研究』(37) 1990.3

pp.1-90 (http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3051294_po_37-03.pdf?contentNo=1) また第1回の町野録音の公開にあたっては、当時の担当者広瀬順皓が「政治談話録音」の経緯と今後の問題をまとめている。『国立国会図書館月報』(363) 1991.6 pp.2-9 <請求記号 Z21-146>

保管・公開

談話の聴取にあたっては、初回から昭和56(1981)年の「藤山愛一郎政治談話録音」までは、オープンリールデッキを用いて録音され、その一部は後日音盤(レコード)化を行った。初期の頃の録音の一部には、録音時のデッキのモーターの過熱が原因したのか、後に再生すると音声が不安定な部分もあった。昭和62(1987)年に実施した、最後の「勝間田清一政治談話録音」のみは、カセットテープによる録音となっている。録音は「30年非公開」という原則をとり、録音時から30年を経過した時点で順次公開してきた。ただし「勝間田録音」は、本人との了解に基づき10年で公開、「市川房枝政治談話録音」は市川房枝記念会の了解のもと、27年余後に公開した。

聴取した録音テープは、公開時までは憲政資料室書庫内の施錠されたキャビネット内に収納され、公開のための準備作業として、録音テープからカセットテープ(後にCD-R)および速記録を作成した。

録音公開を振り返って

町野武馬

第1回の「町野武馬政治談話録音」の公開は平成3年6月1日であるが、その準備作業を開始したのは、直前の同年2月からであった。まず録音テー



オープンリールデッキ



町野武馬の談話聴取(1961年)
町野は右から2人目、左手前は山本有三

プを試聴し、カセットテープに変換する必要があった。20余年前の当時においても、オープンリールテープを再生する機器は館内にも少なく、視覚障害者のための録音図書作製を担当している部署から借りてきたものを使用した。テープ自体の状態は思いのほか良好だったが、再生したところ、音声聞き取るには相当の困難があった。ひとつには、談話者の町野が録音時すでに80代半ばの高齢であり、かつ独特の会津弁のイントネーションであったことが挙げられる。また談話のテーマ上、戦前の中国の地名、人名が頻繁に現れ、語句を特定できるまで時間を要したこともある。

速記録作成にあたっては、テープからの文字起こしの作業を業者に委託し、専門家のアドバイスを受けながら固有名の確認等を進めた。担当した業者が日本近現代史の分野で経験豊富だったことや、戦前に中国と関わりのあったことなどの幸運も重なり、最初に試聴したときには意味不明だった部分が、文意を通じるような原稿となってきた。しかし一部の語句はついに特定できず、カタカナ表記のままとした部分もある。

公開にあたって町野の著作権継承者の承諾を得るため、湯河原に残る町野邸を訪ねた。町野邸は話が行われた当時の佇まいを残していた。ご子息

に録音を聞いていただきながら、当時の思い出話に花が咲いた。戦後、町野邸には吉田茂元首相をはじめ政界人、言論人、旧軍人など多種多彩な人物が入り交わっていたそうである。録音にあたっては、事前に聴取を希望する項目を町野に提出していたようだが、実際の録音は必ずしもこの項目に沿っているわけではなく、大陸浪人だった町野の奔放な懐古談という性格を帯びている。対談者の山本有三、後藤隆之助は町野よりかなりの年少であるが、ともに戦前期から活動しており、同じ時代の空気を共有した者どうしの話しぶりである。音声中には、町野が客人にお酒を勧める声や、お銚子がぶつかって鳴っているような音も収録されており、まさに放談会の様相を呈している。



木戸幸一の談話聴取（1967年）
後方左から木戸、山本有三、後藤隆之助、大久保利謙

牟田口廉也

第2回の「牟田口廉也政治談話録音」のうち、昭和38（1963）年4月に聴取した盧溝橋事件関係の談話については、町野談話に引き続き山本有三が聞き手を務めている。一方、昭和40（1965）年2月聴取のインパール作戦関係の談話は、牟田口があらかじめ用意した資料を一方的に読み上げ、自身が指揮した作戦について弁明するという「独白」となっている。なお、筆者が学生だった昭和50年代中頃、日中戦争をテーマとした当時のNHKの歴史番組の中で、国立国会図書館で保管されている盧溝橋事件関係の談話録音について、録音の30年後に公開されることがいささかセンセーショナルに放映されたことを覚えている。その後10数年を経て、その公開作業に携わることになるうとは予想もできなかった。

今村均、鈴木茂三郎

3人目の今村均までは、談話者はすべて旧陸軍関係者であった。「今村均政治談話録音」では陸軍の派閥や機密費等に話が及び、参謀本部作戦課長在任中に起こった満洲事変への心情も語られている。

4人目の談話者は、議会政治家として著名な元社会党委員長鈴木茂三郎となった。鈴木はジャーナリスト出身の無産政党政治家で、戦前の社会主義運動や戦後の社会党の路線対立の話題のほか、とくに財界人も含めて関わりの深かった人物への評価が興味深い。

木戸幸一

終戦時の内大臣木戸幸一の談話は、このシリーズで最長の17時間に及ぶ。昭和初期の政党内閣の崩壊から軍部の台頭、開戦前後の上層部の動きと終戦工作の経緯などが、昭和天皇の側近中の側



左：迫水久常（中央）の談話聴取（1972年） 左は河野元館長
右：賀屋興宣（中央）の談話聴取（1975年）



近であった人物の口から語られている。木戸は戦後、東京裁判の被告となり終身刑を科され、また自身がつけていた「木戸日記」が裁判における最重要証拠となったが、釈放後10年を経た時期に、『木戸幸一日記』『木戸幸一関係文書』（いずれも東京大学出版会 1966）が相次いで出版刊行されたことも、談話聴取の好機となったと考えられる。聞き手は、山本有三、後藤隆之助のほか、憲政資料室の創始者で、当時当館の非常勤調査員を務めていた歴史家大久保利謙³が担当している。大久保は明治の元勳大久保利通の嫡孫で、同じく木戸孝允の系統を継ぐ木戸幸一とは共に旧華族（侯爵）出身という間柄であり、忌憚^{きたん}ない話を引き出している。

迫水久常、賀屋興宣

引き続き、2.26事件時の首相秘書官で、終戦時には内閣書記官長の職にあった迫水久常、さらに開戦時の大蔵大臣賀屋興宣の談話聴取が実施された。二人とも戦中には官僚出身者として政府の要職に就いたが、戦後は国会議員となっており、当館としても比較的接触しやすい地位にあったと思われる。

談話録音聴取当時、参議院議員であった迫水の対談者は、元参議院事務総長で当時の国立国会図書館長河野義克（昭和47（1972）年の談話録音当

時は東京市政調査会理事長）が担当している。昭和44（1969）年の迫水談話では、鈴木貫太郎内閣下での終戦の舞台裏が臨場感を持って語られており、前記の木戸幸一の談話と相補うものとなっている。昭和47年の談話は、2.26事件の渦中における軍部、閣僚に対する批評が中心となっている。

一方、賀屋の談話は、戦前・戦中の国家財政を担う賀屋と軍部との間での、軍事費をめぐる攻防や戦時経済について触れる一方、開戦・終戦時の心情や自身の戦争責任にも及んでいる。

市川房枝、藤山愛一郎

市川房枝と藤山愛一郎は、周知のように戦後の政界にあってクリーンなイメージを代表する政治家である。ただし日本の婦人参政権運動の流れを追う市川の談話録音は、戦前、戦中から終戦直後の部分で終わっている。後日あらためて戦後の活動について聴取する予定だったが、市川の急死のために果たせなかった。市川の闊達な話しぶりの談話を聞いていると、談話聴取のタイミングの難しさを思い知らされる。

一方、藤山の談話録音は、財界から政界へ転身

³ 大久保と憲政資料室の関わりについては、次の文献がある。藤本守「この人を知る 大久保利謙」『国立国会図書館月報』(606) 2011.9 pp.17-19 (http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3192241_po_geppo1109.pdf?contentNo=1)。二宮三郎「憲政資料室前史」中・下 『参考書誌研究』(44) 1994.8 (http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3051373_po_44-05.pdf?contentNo=1)、(45) 1995.10 (http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3051383_po_45-05.pdf?contentNo=1)



左：市川房枝（右）の談話聴取（1978年） 質問者は左から山口美代子、児玉勝子
右：勝間田清一（右）の談話聴取（1987年） 左は岸本弘一

した背景や岸信介、吉田茂との関係、さらに外務大臣時代の日米安保条約改定問題、自民党総裁選出馬、日中関係への関わりなどが内容となっている。談話は、当時ホテルニュージャパン内にあった藤山事務所で収録されたが、そのわずか1か月半後にホテルの火災が発生し、事務所内に保管していた貴重な資料も焼失したといわれる。

勝間田清一

回を経るにしたがい、談話聴取の段取りや質問事項が事前に入念に検討されるようになった。最後の「勝間田清一談話録音」に至っては、事務局側の徹底したタイムスケジュールのもとに実施されていることがわかる。戦後社会党委員長となった勝間田は、戦前は企画院官僚として企画院事件

にも関与した経歴を持つ。冷静な話しぶりとも相まって、初回の町野武馬のものとは全く雰囲気異なる談話録音となっているのも興味深い。

回想録、一次資料との関係

先述のように、談話収録の時点で、すでに本人の回想録等が刊行されている場合も多い。表2に示すように、談話者のほとんどが談話聴取と前後して回想録等を刊行しており、談話聴取に応じる



談話者のおもな回想録など

談話者	おもな回想録など
町野武馬（1875-1968）	『会津士魂風雲録 町野武馬翁とその周辺』（会津士魂風雲録刊行会編・刊 1961） ＜請求記号 289.1-A266＞
今村均（1886-1968）	『今村均大將回想録』全4巻、別冊上・中・下（自由アジア社 1960-1961） ＜請求記号 289.1-I323i＞
鈴木茂三郎（1893-1970）	『私の歩んだ道』（河出書房新社 1960）＜請求記号 289.1-Su853w＞ 『ある社会主義者の半生』（文芸春秋新社 1958）＜請求記号 289.1-Su853a＞
木戸幸一（1889-1977）	『木戸幸一日記 上・下』（東京大学出版会 1966）＜請求記号 210.7-Ki128k＞ 『木戸幸一関係文書』（木戸日記研究会編 東京大学出版会 1966）＜請求記号 210.7-Ki133k＞
迫水久常（1902-1977）	『機関銃下の首相官邸 ニ・二六事件から終戦まで』（恒文社 1964） ＜ちくま文庫版（2011）請求記号 GB511-J116＞ 『大日本帝国最後の四か月』（オリエント書房 1973）＜請求記号 GB531-36＞
賀屋興宣（1889-1977）	『戦前・戦後八十年』（経済往来社 1976）＜請求記号 GB511-53＞ 『評伝賀屋興宣』（宮村三郎著 おりじん書房 1977）＜請求記号 GK73-65＞
市川房枝（1893-1981）	『市川房枝自伝 戦前編（明治26年5月・昭和20年8月）』（新宿書房 1995）＜請求記号 GK64-G4＞ 『覚書・戦後の市川房枝 市川房枝伝・戦後編』（新宿書房 1985）＜請求記号 GK64-30＞
藤山愛一郎（1897-1985）	『私の自叙伝』（学風書院 1957）＜請求記号 289.1-H995w-(s)＞ 『政治わが道 藤山愛一郎回想録』（朝日新聞社 1976）＜請求記号 A11-Z-214＞
勝間田清一（1908-1989）	『勝間田清一著作集』全3巻（日本社会党中央本部機関紙局 1987）＜請求記号 A11-Z-E28＞

表2 談話者のおもな回顧録など



政治談話録音のテープ、音盤を取めたキャビネット

時期と、本人の半生について文章での記録を公にする時期とが近いことがわかる。これまでの談話録音は原則30年間非公開であったので、公開時点で、談話の内容のかなりの部分が刊行物によりすでに明らかとなっていることが多い。言い換えると、談話録音の公開に向けて速記録を作成する段階で、参考になる資料がある程度揃っているということである。談話記録は、回想録等の刊行された資料で相補い、証言の正確性や背景事情を検証することにより、資料としての立体感を帯びてくるものと考えられる。一方で、談話で語られる事実と、書簡や日記、書類等の関連する一次資料により明らかになる事実との齟齬という根本的な問題が生じる場合がある。この点は、最後の課題のところでも触れることとする。

所蔵するその他の談話記録

「政治談話録音」以後、国立国会図書館は新たな録音を実施していない。ここでは、憲政資料室が所蔵する他の談話記録を簡単にご紹介する。

まず、国立国会図書館が実施したものに「日本国憲法制定に関する談話録音」がある。これは、日本国憲法制定過程に関する資料収集の一環として、昭和29（1954）年から昭和32（1957）年に

かけて、吉田茂、金森徳次郎などの制定過程に関わった9人の人物に対して実施したもので、昭和52（1977）年から公開している。現在はCD-Rでの利用となっており、一部の談話録音については速記録も作成されている。

戦前期の談話記録としては、明治維新期に活躍した人々の談話を旧藩関係者などによる史談会が収集した『史談会速記録』が著名である。それに比すと規模は小さいながら、憲政資料室の所蔵する「憲政史編纂会収集文書」中に「談話速記」が収録されている。同会が憲政史編纂事業の一環として昭和12（1937）年以來収集した資料の中に、安達謙蔵、尾崎行雄、田川大吉郎、若槻礼次郎等、当時の著名政治家の談話を速記したものがある（利用はマイクロフィルムまたは複製版⁴）。

戦後のものとしては、近現代史の研究者グループが収集した談話記録「木戸日記研究会旧蔵資料」と「内政史研究会旧蔵資料」を所蔵している。前者は、政治史学者の岡義武などが中心となり主に旧軍人の談話を、後者は政治・行政学者の辻清明や升味準之輔を中心としたグループが主に旧内務官僚の談話を聴取した記録である。速記録とその原稿のほか、「木戸日記研究会旧蔵資料」は録音テープをCD-R化して公開している。また、旧内務省出身者を中心とした親睦団体である大霞会が、『内務省史』編纂刊行のために行った関係者による座談会の速記録「大霞会旧蔵内政関係者談話録音速記録」がある。このほか、「日本近代史料研究会旧蔵資料」「石井光次郎関係文書」などの中に談話録音（カセットテープ、CD-R）が含まれている。

談話録音の課題

近年、歴史研究において、関係者の談話録音（オーラル・ヒストリー）が重要な一次資料として使用されるようになってきている⁵。政治家、官僚、ジャーナリスト等、戦後日本の政策決定に関わった重要人物の談話録音が、御厨貴や伊藤隆による、政策研究大学院大学の「C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト」や「近代日本史料研究会」の活動により、精力的に実施されているが、これらの速記録は談話者の承諾を受けて、談話聴取からそれほど時間をおかずに刊行公開されており、現代史を検証する貴重な資料となっている。また談話を契機として、談話者が所蔵する資料の発掘につながる場合も多い。

前述したように、談話の内容と文字で残っている一次資料が食い違うということはしばしばある。本人の記憶違い、あるいは事実をふくらませたり、意図的に虚偽の証言を行うことなどもありえるので、談話内容については、回想録などの刊行された資料に加えて、書簡、日記などの一次資料や関係書類、また第三者の証言などから慎重に検証する必要がある。また、録音や速記録では再現することのできない談話者の表情やしぐさなども、本来、談話と一体の重要なポイントとなる可能性があることも考慮に入れておかなければならない。さらに、研究者が独自に聴取した談話記録についても、いずれ何らかの形で公にされ検証可能となれば、歴史研究の一助となろう。

おわりに

以上、「政治談話録音」の回顧から談話録音の課題にまで至ったが、歴史の証人が残した談話記録には、多少の記憶違いや、同じ話の繰り返しな

どはあっても、書かれたものとは異なる生々しい迫力が感じられ、談話者の人柄がかいま見えるという点で、貴重な資料であることはいうまでもない。昨今の近現代史をテーマとしたテレビ番組で、映像を補う重要な要素の一つとして活用されることが多いのもうなずける。

憲政資料室では今後も、録音資料と、書簡・日記・書類などの文字として残された一次資料を一体の近現代政治史料として位置づけ、公開していきたいと考えている。

(ほりうち ひろお 利用者サービス部司書監)



「政治談話録音」は、東京本館憲政資料室で備付デッキによりCD-Rで試聴できるほか、速記録も提供しています。ご利用は登録利用者の方に限ります。憲政資料室の利用は閲覧許可制になっておりますので、入室の際、備付の閲覧許可申請書に、氏名、連絡先、調査目的・研究テーマ等を記入、提出していただきます。「政治談話録音」「日本国憲法制定に関する談話録音」については、リサーチ・ナビ>憲政資料室の所蔵資料>「憲政資料」の検索ガイド (<http://navi.ndl.go.jp/kensei/entry/kenseiguide.php>) でご案内しています。

4 広瀬順昭監修・編集『憲政史編纂会旧蔵 政治談話速記録』全10巻（ゆまに書房 1998-1999）<請求記号 GB631-G9>

5 参考文献として次のものがある。
政策研究院政策情報プロジェクト編『政策とオーラルヒストリー』中央公論新社 1998 <請求記号 EA1-G31>
御厨貴著『オーラル・ヒストリー 現代史のための口述記録』中央公論新社 2002 <請求記号 GB561-G96>
また、関係者へのインタビューを使った最近の研究成果としては次のものなどがある。
服部龍二著『日中国交正常化 田中角栄、大平正芳、官僚たちの挑戦』中央公論新社 2011 <請求記号 A99-ZC9-J80>

国立国会図書館 建築の歩み

国立国会図書館東京本館の本館は、平成23年に第1期建築物完成から50周年を迎えました。この機に東京本館で開催した建築に関する小展示の内容を中心に、国立国会図書館の建築物をご紹介します。図書館の施設にもご関心を持っていただくきっかけになれば幸いです。



東京本館耐震改修工事で設置された、書庫棟（左側）と事務棟（右側・奥）をつなぐ鉄骨ブレース

1 東京本館建設まで——施設の前史

(1) 国立国会図書館の源流

国立国会図書館の前身には、旧憲法下の帝国議会に属していた貴族院・衆議院の図書館と、文部省に属していた帝国図書館（名称は様々に変遷）の二つの流れがあります。

帝国議会における議会図書館は、明治23（1890）年に衆議院・貴族院の事務局でそれぞれ図書に関する事務を開始したときに始まります。同年11

月に完成した議事堂仮建築内に書籍庫と書籍室が置かれていましたが、翌年1月、仮議事堂とともに焼失しました。議事堂の再建にあたり、当時の貴族院書記官長金子堅太郎が院内に図書館を建築して両院で共用すべきという提言をするなど、議会図書館建築を求める動きがありましたが実現は見ず、戦前においては、最終的に昭和11（1936）年に竣工した議事堂の4階中央部に、両院それぞれの図書館が開設されることとなりました。

帝国図書館としての流れは、明治5（1872）年に文部省が設立した書籍館^{しょじやくかん}が発端です。徳川幕府の蔵書を引き継いで湯島聖堂大成殿に開館し、明治18（1885）年に上野に新築移転するまで、「湯島の図書館」あるいは「聖堂の図書館」として親しまれました。この前後、所管・地位の変遷を経て、明治30（1897）年に帝国図書館官制が公布され、帝国図書館が誕生しました。明治32（1899）年、東洋最大の国立図書館建設をめざして音楽学校敷地内の空地で新館の工事を開始しましたが、財政難のため経費が大幅に削減され、予定規模の4分の1が完成した明治39（1906）年に、現在国際子ども図書館として残る建物が開館しました。昭和4（1929）年には念願の増築を果たしましたが、それでも当初設計の約3分の1にとどまり、いわば未完の図書館でした。

帝国図書館の建物は、関東大震災でもほとんど被害を受けませんでした。しかし、避難者等を収容し¹救助を優先したため、閉館期間が1か月に及びました。また、第2次世界大戦でも、蔵書等は長野県立図書館へ疎開させましたが、上野公園一帯は戦火を免れ、帝国図書館時代の施設を今に伝えています。この建物は、前述のように現在国際子ども図書館として使用し、東京都の歴史的建造物に指定されています。

(2) 国立国会図書館の設立——仮庁舎時代



旧赤坂離宮仮庁舎（花鳥の間）

戦後新たな憲法の下に制定された国会法には、国会図書館を設置すべきことが規定されました。これを受けて国立国会

図書館法が制定され、国立国会図書館は、昭和23（1948）年2月25日の館長任命をもって、国会議事堂内で発足しました。当初は施設がなかったため、

旧赤坂離宮の一部を仮庁舎として、同年6月5日に開館を迎えました。仮庁舎が狭くなったため、また、国会奉仕の利便のため、昭和24（1949）年3月、調査及び立法考査局は国会議事堂3階の参議院委員室に移転、その後、現在の本館に移転する昭和37（1962）年3月まで、三宅坂の参謀本部跡に仮庁舎を建築して使用しました。



三宅坂分室（現衆議院憲政記念館の場所）

2 国立国会図書館建設の計画

(1) 国立国会図書館建築委員会の審議

昭和23年2月、国立国会図書館法と同時に、国立国会図書館建築委員会法が制定されました。この委員会は、国立国会図書館長を委員長、衆参両院の議院運営委員長、建設院総裁（現国土交通大臣）、建築専門家を委員とする5名で構成し、国立国会図書館の建築に関して国会に勧告を行う職務を有しています。委員会は昭和23年から敷地・計画・設計準備・予算措置等について審議を重ね、昭和27（1952）年12月、全体計画4万5千坪、第一次計画として1万5千坪規模の本庁舎建築についての勧告を国会に提出しました。

(2) 建築設計競技

本庁舎の設計は懸賞競技（コンペ）により公募し、応募作品122点から一等の「前川國男建築

1 「関東大震災と上野図書館」『国立国会図書館月報』（606）2011.9 pp.20-22 (http://dndl.go.jp/view/download/digidepo_3192241_po_geppo1109.pdf?contentNo=1)



左から 東京本館 第1期完成時外観（南方向および北西方向から） 第2期完成時外観（南方向から）

設計事務所内 田中誠、大高正人 外 ミド同人18名」以下9点が入選しました（MID: Maekawa Institute of Design）。

3 東京本館（本館）

(1) 第1期工事

永田町の本庁舎（現東京本館の本館）の第1期工事は、昭和28（1953）年度から36（1961）年度にかけて実施されま

した。昭和28年度には敷地外柵工事、防空壕撤去工事等を行い、昭和29年度に地盤の掘削から建築工事を開始、昭和36年7月にほぼ竣工、8月に旧庁舎から移転し、赤坂離宮、三宅坂のほか、国会議事堂、上野、大倉山²から計200万冊の蔵書が運び込まれ、同年11月に開館を迎えました。

これにより全体の2分の1強に当たる延床面積約2万6千㎡余が整備されました。書庫棟は現在の17層のうち10層まで、現在書庫棟をぐるりと取り囲むように建っている事務棟は、4階以上が

本館の事務棟には、各階の天井に部分的に細長い鉄板が入っています。事務室内に固定書架（書棚）を設置する必要が生じた場合に、転倒防止のため、書棚の柱を固定できるよう取り付けられたものです。



南面しかありませんでした。

(2) 第2期工事——全館完成

第1期工事が竣工する一方、利用者や蔵書の増加ペースから両年のうちにも施設の狭隘が予想されており、建築委員会は昭和36年7月、速やかに第2期工事に着手する必要性についての勧告を国会に提出しました。

昭和40（1965）年度予算においてようやく基本設計等経費が計上されました。工事は昭和41（1966）年度から43（1968）年度にかけて実施され、昭和43年6月に書庫棟増築部分、8月に事務棟増築部分が竣工しました。閲覧室の移転、模様替え等も行い、同年12月にすべての工事が完了して、鉄骨鉄筋コンクリート造地上6階地下1階（書庫棟地上12層地下5層）延べ床面積73,674㎡の本館が完成しました。

(3) 耐震改修工事

東京本館（本館）は、現在の建築基準法が施行される以前の耐震基準に基づいて設計されているため、平成18年度に耐震診断を行いました。その結果、国の施設として十分な耐震性能が確保されていないことが判明し、耐震改修工事を実施することになりました。

平成19年度から20年度に設計を行い、安全性はもちろん、建物の意匠性や図書館サービスへの影響なども考慮して設計しました。工事は平成21年度に着手し、平成25年7月末に完成する予定です。



左から 新館 完成時外観（北西方向から） 関西館 完成時外観（北西方向から）

4 東京本館（新館）

国立国会図書館が開館30周年を迎えた昭和53（1978）年、本館北側の敷地に本館とほぼ同規模の新館を建設することになりました。昭和61（1986）年5月に地上4階から地下4階まで、平成5年に残りの地下8階までが完成しました。鉄骨鉄筋コンクリート造地上4階地下8階の比較的低層のL字型の建物（総面積72,942㎡）で、南側の本館や国会議事堂、北側の最高裁判所と景観上の均衡を保つ高さ・容積となっています。

地下1階から8階には書庫が配置されています³。膨大な蔵書が収められると建物の重量が非常に大きくなるので、地表から25m以下にある東京礫層という固い地盤に建物を乗せるのがよいと設計者が考えたこと、また、景観の保存を考慮したことによるものです。まず、地中連続壁という厚さ1mの鉄筋コンクリート壁を地下基礎以深まで設置し、最初に地下1階を造ってから地下に掘り進んでいく工法で、掘削された土は21万㎡に及びました。施工にあたっては重厚な防水（防湿）工法



地下書庫（防水のための二重壁）

をとっています。一般に地下は地震に強いといわれていますが、平成23年3月11日の東日本大震災でも、地下の書庫では資料の落下がほとんど見られませんでした。

5 関西館

関西館は、図書館資料の収蔵スペースの確保、高度情報化社会における情報需要への対応などを目的に計画されました。設計は、関西館建築設計競技（国際コンペ）において最優秀作品に選ばれた、陶器二三雄氏（陶器二三雄建築研究所所長）の作品を採用しています。工事は平成10年度から14年度にかけて行い、平成14年8月に竣工、地下は鉄骨鉄筋コンクリート造4階、地上は鉄骨造4階、延床面積58,768㎡の施設として、平成14年10月に開館しました。

関西館がある関西文化学術研究都市は京阪奈良と呼ばれる豊かな自然が残っている地域で、建物の随所にそれを意識した設計が見られます。上写真で建物の前方に見える鋸屋根は、北向きの面（表面に見える面）には芝を張り、南向きの面には、光を乱反射する特殊なガラスを使用して、下に位置する閲覧室に自然の光を取り込んでいます。地下書庫の一部には、約140万冊の収蔵能力をもつ自動書庫が設置されています⁴。



関西館中庭

2 財団法人大倉山文化科学研究所（現大倉精神文化研究所）が昭和26（1951）年4月から昭和35（1960）年7月まで国立国会図書館の支部図書館であった関係で、蔵書の一部が保管されていた。

3 新館書庫については「国立国会図書館の書庫 第1回 東京本館」『国立国会図書館月報』（579）2009.6 pp.17-19（http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_1001143_po_geppo0906.pdf?contentNo=1）参照。

4 関西館の書庫については「国立国会図書館の書庫 第2回 関西館・国際子ども図書館」『国立国会図書館月報』（580）2009.7 pp.20-21（http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_1001547_po_geppo0907.pdf?contentNo=1）参照。



左から 国際子ども図書館 完成時外観（東方向から） 明治期から残る大階段

6 国際子ども図書館

国際子ども図書館は、上野公園内の帝国図書館の建築を使用しています（本稿1（1）参照）。開館にあたり、耐震改修を行う必要がありましたが、貴重な建築遺産の意匠・構造を最大限に保存するよう、免震工法を採用した増築・保存改修工



上：天井の装飾の復元作業 中：開館
当時から残る避雷針を復元し、取り付
ける 下：免震装置

事を平成10年度から13年度に行いました。設計は安藤忠雄建築研究所および日建設計で、明治、昭和、平成それぞれの建築を一体化した、鉄骨補強煉瓦・鉄筋コンクリート・鉄骨鉄筋コンクリート造地上3階（一部7階）、地下1階、延床面積6,671㎡の施設です⁵。

5 詳細は「国立国会図書館を見学してみよう 国際子ども図書館編」『国立国会図書館月報』（590）2010.5 pp.16-19 (http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3050781_po_geppo1005.pdf?contentNo=1) 参照。

7 将来に向けて

(1) 国際子ども図書館の拡充整備

国際子ども図書館は、平成17年3月の国際子ども図書館の図書館奉仕の拡充に関する調査会答申を受けて、現在の敷地北側に新館を増築することとなりました。新館は鉄骨鉄筋コンクリート造（一部鉄骨造）地上3階地下2階、延床面積約6,200㎡で、工期は平成23年度末から平成27年度までを予定しています⁶。

(2) 関西館の第2期整備

関西館建設時の建築委員会勧告は、関西館の最終目標規模を敷地面積82,500㎡、延床面積165,000㎡とし、これを段階的に整備することとしています。現在の試算では、平成29年度末頃に東京本館と関西館をあわせた書庫の収蔵能力が限界に近づくとされているため、第2段階目の施設整備の検討を進めているところです。

（総務部管理課）

6 最新の状況を国際子ども図書館ホームページ「建築状況」(<http://www.kodomo.go.jp/about/future/construction/index.html>)に掲載している。

国際子ども図書館の新館建設予定地では、平成23年7月から事前調査のための埋蔵文化財の発掘調査を行っており、同年10月に明治期の水道管が発掘されました。水道管の埋設時期や給水先はまだ不明ですが、明治33年の刻印があることから、帝国図書館時代のものと思われます。東京に初めて近代水道が通水したのは明治31年で、水道管としてはかなり古い時期のものとなります。刻印の特徴から、ベルギーのリエージュ市水道鉄管会社製であることが判明しました。



職員採用のための地道な日々

今年も国立国会図書館に元気な新人職員が入館してきました。総務部人事課任用係にとっては1年を通して行ってきた一つの仕事がゴールを迎えるときでもあります。

国立国会図書館の職員になるには、「国立国会図書館職員採用試験」という独自の公務員試験に合格する必要があります。

この採用試験の事務全般を行っているのが任用係です。大卒程度の試験を例にとると、2月ごろから採用試験の受験申込書の作成が始まり、3月には学校や受験希望者への受験申込書の郵送、その後4月下旬まで受験申込みを受け付け、受験者のリストを作り、受験番号を決定します。受験申込者が確定すると、第一次試験の準備です。試験会場の構内のどこにどのような案内板を立てるか、部屋割はどうするかなど細かいことを検討し、必要な張り紙や座席に貼る受験番号シールなどを作成します。試験当日は、設営、試験監督、撤収を行いますので朝から晩まで大忙しですが、緊張でもっと大変そうな受験生を見ると泣き言は言っていないと思います。心の中で「みんながんばれ！」と思いながら淡々と作業を進めます。細々した作業が大量にあります、受験生の人生がかかっていますので、間違いのないよう細心の注意を払います。

2度の筆記試験、2度の面接試験を経て、8月



には合格者が決定します。合格通知を送ってもまだ終わりではありません。入館後の生活について入館予定者に知ってもらうために、採用されるまでの間、任用係手作りの月刊誌を送付しています。内容は、いくつかの部署の若手職員に、仕事の内容、職場の雰囲気、1日のスケジュールなどについてインタビューしたものです。

4月に新規採用者を迎え入れ、新人研修のために人事課研修係に引き渡したとき、やっとその年の採用は終わりますが、すでに翌年の採用日程がスタートしています。この号が出るころには、平成24年度職員採用試験の受付は締め切り直前です。任用係にとっては未来の職員と会うための新しい1年の始まりです。

(人事課任用係 モール)

国会と国民とをつなぐ 「国会関連情報」のページ

国立国会図書館は、国会に設置された図書館として、国会議員の立法活動を補佐するため、文献等に基づいた立法調査サービスと図書館の蔵書を提供する図書館サービスを提供しています。これら国会に対するサービスの拡充に向けて定めている「国会サービスの指針」では、「国会と国民とをつなぐ役割」の拡充強化を目標のひとつに掲げています。

平成24年2月、国立国会図書館ホームページのリニューアルに伴い、国会の活動から生まれた各種の情報を広く提供する「国会関連情報」のページを新たに設けました。

※画面はすべて平成24年3月15日現在



「国会関連情報」のページでは、次のような情報を簡便に入手することができます。

調査及び立法考査局の刊行物

国政上の課題に関する各種の調査の成果をとりまとめた刊行物を提供しています。平成15年以降に各刊行物に掲載された記事を、刊行物のタイトルごとに刊行年月日順で掲載しており、後述の「検索窓」で検索することもできます。

○『調査と情報 - Issue Brief -』（不定期刊）

時々の国政課題に関する簡潔な解説シリーズです。各号でひとつのテーマを取り上げ、10ページ程度にまとめています。

○『レファレンス』（月刊）

各分野の国政課題の分析、内外の制度の紹介、国政課題の歴史的考察等、詳しい論説を掲載した調査論文集です。

○『外国の立法』（季刊版および月刊版）

外国法令の翻訳紹介、制定経緯の解説、外国の立法情報を収録しています。解説、翻訳等を内容とする季刊版と、諸外国の立法動向を簡潔にまとめた月刊版があります。

○『調査資料』（随時刊行）

特定のテーマに関する多面的な調査の成果をまとめた調査報告・資料集です。長期的・主題横断的な課題に関する総合調査プロジェクトの報

告書、科学技術に関する調査プロジェクトの報告書、各国憲法集などがあります。

立法情報ドキュメント

国会が立法活動や行政監視活動を行う上で参考になる政府機関・研究機関による研究報告、調査統計、判例など、インターネット上の最新のドキュメントへのリンクを掲載しています（右画面）。

月日	分類	ドキュメント名	リンク先
7月10日	研究	12月11日「グローバルフォーラム」資料との対照に新編「日本のグローバル化」の経緯を調査（英文）	グローバルフォーラム
7月10日	衆議院大審議	12月11日「経済行政」の経緯を調査（英文）	議院
7月10日	衆議院大審議	12月11日「経済行政」の経緯を調査（英文）	議院
7月10日	計画金融	12月11日「経済行政」の経緯を調査（英文）	国際機関
7月10日	社会福祉	12月11日「経済行政」の経緯を調査（英文）	内閣府
7月10日	国際機関・国際法	12月11日「経済行政」の経緯を調査（英文）	国際機関
7月10日	裁判・判例	12月11日「経済行政」の経緯を調査（英文）	最高裁判所
7月10日	公法・行政	12月11日「経済行政」の経緯を調査（英文）	日本弁護士連合会

立法情報リンク集

「立法情報ドキュメント」を補完する、立法活動に参考となる内外の機関のウェブサイトへのリンク集であると同時に、国会の活動をよりよく知っていただく目的のもとに国会の諸機関のウェブサイトや関連情報へのリンクを充実させています。

収録されたウェブサイトは大きく二つに分かれています。「国内情報」では、国会、官庁、マスメディアなどのほか、調査研究機関、研究者などについて調べられるサイトへのリンクを参照しやすく分類して掲載しています。例えば「法令・判例等（日本）」では、国の機関がインターネット上で法令条文および判例の本文情報を提供しているサイト、「都道府県」では、都道府県、議会、公報、例規、行政情報などのサイトに簡単にアクセスで

きます。また、「国際・諸外国・地域情報」では、おもな国際機関や、主要国の立法・行政・司法機関のウェブサイトを中心に掲載しています。

国会関連データベース

国立国会図書館は、衆参両院事務局との共同事業として構築した「国会会議録検索システム」をはじめ、国会に関連する情報の各種データベースを作成しています。

○国会会議録検索システム

昭和22（1947）年の第1回国会から開会中の国会までの本会議、委員会の会議録を発言者、日付、会議の別等で検索できるほか、議事部分の全文をキーワードで検索することができます。

○帝国議会議録検索システム

第1回議会から第92回議会（明治23（1890）年～昭和22（1947）年）の帝国議会の速記録

を画像で（戦後部分の一部テキストでも）利用
できます。

○日本法令索引

明治19（1886）年の公文式から現在までに制定
された法令の改廃経過等の情報、帝国議会およ
び国会に提出された法案の審議経過等の情報を
検索できます。国の機関がインターネット上で
提供している法令等の本文情報も参照できます。

○日本法令索引〔明治前期編〕

慶応3（1867）年の大政奉還から明治19年（1886
年）の公文式までに制定された法令の索引情報
が検索できます。多くの法令は本文情報にリン
クしています。



「震災」および「復興」の検索結果一覧（部分）
関連の委員会議事録、質問主意書、刊行物などが一覧できる

「国会関連情報」検索窓

「国会関連情報」のトップページ右下にある検
索窓では、調査及び立法考査局の刊行物、国会関
連データベースに加え、「衆議院ホームページ」「参
議院ホームページ」「裁判官弾劾裁判所ホームペ
ージ」および「裁判官訴追委員会ホームページ」の
統合的な検索が可能です。

これにより、衆参両議院のホームページに掲載
されている議案、請願、質問主意書・答弁書など、

国会の活動を知る上で重要な情報を議院の別なく
一括検索することができます。さらに、国会の諸
活動のためにこれら国会の機関が作成した法案参
考資料、刊行物等を本文中のキーワードで横断的
に検索することも可能です。

どうぞご利用ください。

（調査及び立法考査局）



<http://www.ndl.go.jp/jp/data/diet.html>
国立国会図書館ホームページ
(<http://www.ndl.go.jp/>) の
上部メニューバーからご利用ください

Q 以前のNDL-OPACと同じように、完全一致形で検索したいのですが。

A 新しいNDL-OPACでは、「検索式」画面①で完全一致検索が可能です（画面は上部のタブ②で選択します）。

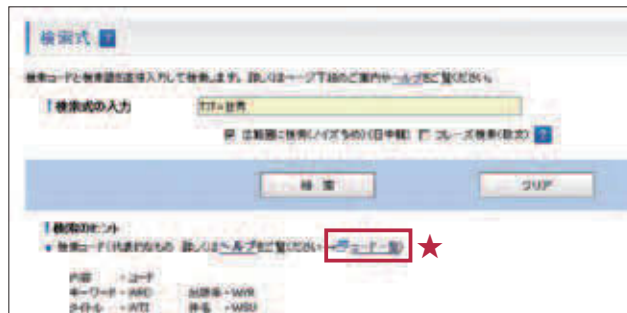
検索の際は、検索語の前に、アルファベットの検索コードと「=」（すべて半角）を付けて検索します。例えば雑誌『世界』を検索する際に、「世界」と入力して検索すると「世界」の文字列を含むノイズ（不要なデータ）がたくさん出てきてしまいます。「TIT=世界」で検索すると、タイトルが『世界』に完全一致するものだけを表示します。「タイトルが『世界』という条件と「資料種別は雑誌」という条件をかけあわせて「TIT=世界 and WTYP=雑誌」で検索すると、ノイズはさらに減らせます。検索式の画面では、このほか、部分一致で検索するためのコードも使えます。

- *完全一致検索のためのコードには、TIT（タイトル）、PUB（出版者）などがあります。コードの一覧は、「検索式」画面の「コード一覧」(①★)をご覧ください。
- *複数の条件をかけあわせる際に「and」だけでなく「or」または「not」でつなぐこともできます（例：「音楽」というタイトルで雑誌以外のもの→「TIT=音楽 not WTYP=雑誌」）。詳しくは、NDL-OPAC「ヘルプ>6 検索のヒント>AND/OR/NOT検索」をご覧ください。

また、検索語の後ろに「*」（半角アスタリスク）を付けることで、前方一致検索も可能です。前方一致検索は、検索語と「*」の前までが一致するものを表示します。例えば「TIT=国際政治*」で検索すると、単行書『国際政治学をつかむ』、論文「国際政治研究の先端」などがヒットします③。雑誌記事に絞るには「TIT=国際政治* and WTYP=記事」で検索します。

- *前方一致検索は時間がかかります。また、短い検索語では該当するデータが多くなるため表示できないことがあります。
- *完全一致検索、前方一致検索のできない項目があります。詳しくは、NDL-OPAC「ヘルプ>6 検索のヒント>完全一致で検索したい（または「前方一致で検索したい）」をご覧ください。

国立国会図書館サーチでは、検索語の前後に「/」（全角スラッシュ）を入れる④ことで完全一致検索が可能です。「詳細検索」画面で完全一致検索の指定に加えて他の条件をかけあわせ、資料種別を特定すると、さらに絞り込むことができます。



①



②



③



④

- この記事は平成24年3月末時点のデータをもとにしています。
- 蔵書の検索方法について、ご意見、ご質問をお寄せください。
電子メール geppo@ndl.go.jp
- 以前の記事 2012年3月号…ノイズを減らす（絞り込み、件名検索、入力した文字列での検索）、NDL-OPACのブックマーク

（利用者サービス部サービス企画課・サービス運営課、
電子情報部電子情報サービス課）

本の森を歩く

国立国会図書館の巨大な書庫の中から、
毎回一つのテーマにそって蔵書をご紹介します。

第9回 英国を魅了した日本

今回は、英国で最近刊行された日本関係の本を取り上げます。



1 Ellis Tinios. *Japanese prints : ukiyo-e in Edo, 1700-1900*. British Museum Press, 2010.
<請求記号 K3-B645>

四代目中村芝翫^{しかん}の鮮やかなクローズアップが目をひく1のサブタイトル *ukiyo-e in Edo, 1700-1900* を見て、おやっと思われる方も多いのではないだろうか。

「1700年」は、私たちが考える江戸時代の初めより100年ほど遅い。徳川家康が幕府を置いた江戸は、京都や大阪に比べると後進の地であり、江戸での出版が始まったのは、寛永年間前後だといわれている。上方の上質な「下りもの」の書物に対して、江戸では田舎でできる粗末なものを意味する「地本」と呼ばれる絵草紙や草双紙が出版されるようになった。草双紙等の版本の挿絵から、墨一色の木版の浮世絵（墨摺絵）が独立したのが1700年前後とされる。丹絵、紅絵、漆絵、紅摺絵と、木版技術の向上により色を加えた庶民の芸術「浮

世絵」は、錦絵の全盛を経て、明治時代の日清・日露の戦争絵の流行の後、「1900年」頃以降、写真やカラー印刷の技術にその座を譲り渡した。

本書の著者ティニオス博士は、大英博物館の膨大な浮世絵コレクションから選び出した作品を例に、浮世絵の絵画としての魅力の紹介にとどまらず、その制作・流通や背景の説明を試みる。

まず最初の章で、浮世絵が19世紀のヨーロッパの絵画に与えた影響を論じ、続く第2の章では、歌川国貞が浮世絵の職人を描いた見立て絵や、下絵、版木、墨摺りと完成図の比較を通して、浮世絵の制作過程をわかりやすく解説している。浮世絵は、一人の画家によって制作されるヨーロッパの絵画とは異なり、絵師によって描かれた下絵が、彫と摺りを重ねられて“destroy”されるとし、芸術作品というよりも商業出版物としての面を強調していることが興味深い。次の章では、幕府の禁に触れた歌麿の作品を例として徳川幕府の検閲制度について述べる。「極め印」の紹介のほか、検閲が明治時代に引き継がれたことにも言及している。

続く4つの章は、歌舞伎絵、美人画、風景画、武者絵の紹介にあてられている。浮世絵には、江戸の「遊び」の精神を反映した二重、三重の意味が隠されていることが多い。また、幕府の検閲を逃れるため、版元や絵師によって巧妙な工夫が施されたものもある。著者は、日本や欧米の最新の研究成果を参考に、豊富な知識で作品の意味をひもとき、江戸庶民の流行をリードした浮世絵の魅



1の後表紙は鳥居清長「両国橋夕照」(1781年)

力を余すところなく伝えている。風景画の章では、著名な作品と並んで、西洋の遠近法の影響がみられる作品が紹介されている。

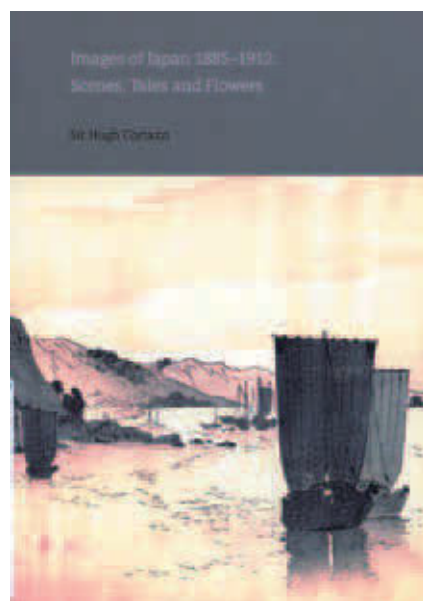
最後の章は明治の錦絵の解説に割かれており、明治維新、開国が浮世絵に与えた影響について述べ、木版浮世絵が大衆のメディアとしての役割を終えたところで筆がおかれる。

大英博物館の浮世絵コレクションを紹介した『浮き世』¹が浮世絵の著名な作品を解説した1冊であるのに対して、本書は浮世絵が生み出される過程を概観するものである。西洋で高い芸術性をもったグラフィック・アートとして称賛された木版浮世絵が、江戸から明治までの大衆文化であり、どちらかといえば俗なものともみなされていたことに、著者が関心を抱いているのは興味深い。

* * *

映画やテレビのなかった時代、外国に関心を持つ人々は、どのようにして「行ったことのない国」をイメージしたのだろうか。浮世絵が江戸時代の日本を海外に伝えたように、「明治の日本」の風景や文化を海外に伝えたものは、木版多色刷りの挿絵本や博覧会のカタログ、カレンダー、手彩色の写真の数々であった。

元駐日英国大使であり、日本に関する多数の編著、翻訳があるヒュー・コータッツィ卿の最新刊である2は、日本ではこれまであまり注目されることのなかった、明治の日本文化を伝えた画像出版物を集めた1冊である。卿が長年にわたり収集した様々な明治の画像出版物から厳選した、「お



2 Sir Hugh Cortazzi. *Images of Japan 1885-1912. Scenes, Tales and Flowers*. Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, 2011. <請求記号 KC216-B5>

¹ Reeve, John. *Floating world: Japan in the Edo period*. British Museum Press, 2006. <請求記号 KC172-B43>



長谷川武次郎
(西宮雄作氏提供)

とぎ話」「子どもたち」「花と庭」「写真帳」等13のジャンルの図版に解説が付されている。

タイトルに使われた「1885年」は、長谷川武次郎が外国向けのちりめん本「日本昔話シリーズ」を最初に出版した年である。ちりめん本は柔らかく加工した和紙で作られたもので、来日した外国人のお土産として好評であった²。本書は、ちりめん本を読むことによって「外国の子どももその両親も、プライベートな日本の家族や家庭に招き入れられた。」という。

このシリーズの印象が強いためか、長谷川のちりめん本は国内では児童書と考えられがちであるが、本書ではその様々な側面が紹介されている。

ユーモアをこめて「詩と、詩よりも激しいこと (Verses and worse)」と名付けられた章では、ちりめん本のキスシーンのシルエットの場面が取り上げられている。「花と庭 (Flowers and gardens)」の章では、長谷川の出版物全体で最も成功したのは、普通紙、ちりめん本を問わず、日本の花に関する刊行物であると言い切る。

これらの美しい挿絵本が海を越えて人々を魅了し、やがては、外国の人々の企画で、フランスの寓話集な

ど、日本以外の事柄をテーマとする挿絵本が生み出されたことも紹介されている³。

「写真帖」の章で紹介されている小川一真は、明治の写真製版技術をリードし、写真師として初めて帝室技芸員を拝命した芸術家である。彼はまた、営業写真師として箱根や日光、日本の庭園などの風景、着物や美人芸者の肖像等の写真を撮影し、英文の説明文を入れた外国人向けのアルバムや写真帖を多く企画し出版した出版人でもあった。このほか、小川と同様に多くの彩色写真を残した、高木庭次郎や玉村康三郎の作品も掲載されている。彼らの写真、とりわけ、コロタイプ印刷⁴に手色彩を施したちりめん和紙の写真帖など、凝ったつくりのものも含まれる小川の一連の出版物は、外国への土産物として珍重されて、日本の風俗を世界に紹介する役割を果たした。

* * *



小川一真の写真帖 *Panoramic Japan* (1902) から Japanese peasants (日本の農夫)
<マイクロフィッシュ請求記号 YDM107313>



3 Hoshino Yukinobu. *Professor Munakata's British Museum adventure*. British Museum Press, 2011. <請求記号 KC486-B189>

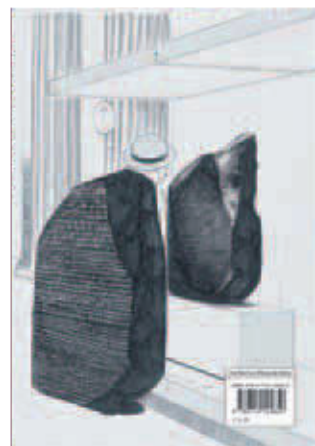
近年、諸外国で人気を博して、著作権ビジネスの市場を拡大しつつある日本のマンガは、浮世絵の流れを汲む日本のグラフィック・アートとして欧米の研究対象ともなっている。

日本のコミックよりもやや大判の**3**は、大英博物館が初めて出版したマンガで、星野之宣作『宗像教授異考録』から「大英博物館の冒険(前編・後編)」⁵の英訳。原著は民俗学者宗像伝奇(モデルは南方熊楠)^{みなかたたくまぐす}を主人公とした人気作品で、小学館の『ビックコミック』に連載され、テレビドラマや小説にもなっている。

2009年、大英博物館で初のマンガ展として星野の原画展が開催され、大英博物館とのコラボレーション企画として、この作品が書きおろされた。『宗像教授異考録 第15集』の巻末に付さ

れている *The Times* 2010年8月10日の記事の邦訳によれば、星野に執筆を依頼することは、大英博物館の学芸員のアイデアであったという。ストーンヘンジの巨石の強奪事件に始まり、ロゼッタ・ストーンをはじめとする大英博物館の宝物の数々が登場する独特の奇想天外なストーリーは、星野自身による綿密な取材をもとに生み出された。舞台は、現在閉鎖されている大英博物館の大閲覧室(旧英国図書館)である。

本書には、マクレガー大英博物館館長の序文、翻訳者であり作中の登場人物のモデルでもあるルマニエール・セイNZベリー日本藝術研究所研究所長による作者紹介と星野へのイ



3のカバーを外した後表紙

ンタビュー、ティモシー・クラーク大英博物館日本セクション長による考察「浮世絵からマンガまで(From ukiyo-e to manga)」が収録されてい

2 長谷川武次郎とちりめん本について詳しくは、大塚奈奈絵「テラコヤ(寺子屋)「日本」を発信した長谷川武次郎の出版」『国立国会図書館月報』(604/605) 2011.7/8 pp.4-17 参照。

3 関連する本誌の記事に、高山晶「フランス寓話と浮世絵 P.バルブトの挿絵本たち」『国立国会図書館月報』(612) 2012.3 pp.4-12、大塚前掲(注2)がある。

4 ガラス板にゼラチンを塗布し、フィルムを露光させて作る版。写真の印刷に適しているが、大量印刷には向かない。

5 『宗像教授異考録 第14-15集』(小学館 2010-2011)に収録。<請求記号 Y84-J22650 (14巻) Y84-J25750 (15巻)>

る。この考察では、日本のマンガの源流を、江戸時代の戯画や見立絵、判じ絵、北斎漫画といった浮世絵のみならず、^{よみほん}読本や黄表紙等の大衆文化の伝統、曲亭馬琴の戯作の白黒の挿絵等を探り、明治以降の西欧の“cartoon”の影響を経て、現代のマンガにつながったとする。マンガやアニメを日本の芸術史の中で俯瞰しようという研究の傾向は、最近、欧米で広くみられ⁶、例えばアニメの



源流を絵巻物に求める研究書『日本のアニメーション 巻物からポケモンまで』がフランスで出版され、その後英訳されている(写真)⁷。このような背景を考えると、本書も単なるコミックの翻訳ではなく、日本のマンガ文化についての最新の知見を提供することを意図しているようである。巻末には、読者の参考のため、本文でカタカナ表記されている擬態語の音と意味の対照表“Sound effects”が掲載されている。

JETRO(日本貿易振興機構)の『英国のコンテンツ市場における実態』と題した2011年3月付けの報告書⁸によれば、日本のマンガは英国では高価で入手しにくく、アニメの放映も皆無に等しい。このため、英国のマンガ・アニメファンは比較的富裕な層が中心で、親が日本を訪れた経験をもつなど、もともと日本への関心が高い家庭で育った人々が多いという。本書は、ヨーロッパやアメリカとは一味違うイギリスのマンガファンの、知性と遊びの精神があふれた1冊である。

* * *

一昔前ならば、日本文化を代表するものは、能、茶道、華道などであった。これらは限られた層の人々が楽しむもので、理解するためには知識や教養を必要とした。ところが最近、世界の関心は、大衆文化であるマンガやアニメ、ファッションなどに移ってきていて、そのことに違和感を抱く向きもある。

ここで紹介した本で取り上げられている、浮世絵、挿絵本・ちりめん本、写真帖、そしてマンガは、その時代の大衆文化を色濃く反映した商業出版物であり、グラフィック・アートである。これらが顧客のニーズを反映した商業出版によって生み出され、庶民の自由な精神や遊び心によって洗練されていったことが、英国では、知識階級の作りだす文化とは一味違う魅力として受け止められている。

日本の我々とは少し違った視点から日本文化の魅力を探る英国の知的なまなざしによって、我々自身も自覚していない「日本の魅力」を見出すことができるのである。

(収集書誌部主任司書 ^{おおつか} 大塚 ^{ななえ} 奈奈絵)

⁶ 日本語の文献に、藤澤紫「新出の「酒呑童子絵巻」と国際交流 ジャパニーズ・アニメーションとコミックの源流」『国学院大学紀要』(48) 2010 pp.341-340 <請求記号 Z22-515>がある。

⁷ Koyama-Richard, Brigitte. *L'animation japonaise : du rouleau peint aux pokémon*. Paris : Flammarion, c2010. <請求記号 KD745-B37>
英訳は、*Japanese animation : from painted scrolls to Pokémon*. Paris : Flammarion, c2010. <請求記号 KD745-B51>

⁸ http://www.jetro.go.jp/jfile/report/07000546/england_jpncontents.pdf

本屋にない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。ここでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

瀬戸内の港町ゆかりの看板・引札展

ユニークで滑稽な広告文化

二〇一〇（平成二十二）年特別展

福山市鞆の浦歴史民俗資料館編・刊

2010.10 73頁 26cm

<請求記号 DH435-J136>

本書は、平成22年10月に広島県の福山市鞆の浦歴史民俗資料館にて開催された特別展「瀬戸内の港町ゆかりの看板・引札展」の図録である。

「看板」はともかく「引札」とは何だろう。そう思う方もあるかもしれない。「引札」とは、今でいうチラシ広告のことである。文字だけのシンプルなものもあれば、正月用引札など浮世絵のような色鮮やかな図柄に宣伝文句や暦を配したものもある。絵師が腕をふるった正月用引札はとても美しく、受け取る側では壁に貼るなどして長く楽しむことも多かったという。

さて、本書の由来となる特別展は、こうした看板・引札のうち、鞆をはじめとする瀬戸内海沿岸の港町で使用されたものにスポットを当てている。地域ごとにカラー図版で紹介された看板・引札の数々には、様々な事物が描かれている。引札に描かれた人々の姿や流行物は当時の様子を映し出し、船や港の図柄は瀬戸内海沿岸地域ならではのもので、かつてと今の姿を比較するのも面白い。明治期の引札に台湾・樺太地域を含む郵便料金表が印字されているのも、歴史の一端を知るアイテムとして興味深い。また、看板については、黒漆や金泥を使った立派で伝統的な木製看板があれば、商品をかたどったもの、珫瑯やガラスを使いモダンなデザインでアピールしたものなど、それぞれが個性的で、生かされた技術も様々だ。

図版の充実とともに本書の特色として注目すべき

は、後半に収録された4本の論文である。戸花亜利州「看板の歴史」と三好一「引札・広告びらについて」は看板・引札そのものの歴史について概観し、園尾裕「広告のパイオニア



吟香と宝丹」は薬の販売で知られ広告活動の先駆者ともいべき岸田吟香と守田宝丹を、水本真由美「森下博」は「仁丹」でおなじみの森下博の偉業についてわかりやすく紹介している。これにより、看板・引札、そして明治期以後の広告史のひとこまをより掘り下げることができる。読後に再び図版のページを開くと、新たな発見があるかもしれない。バランスの良い構成で、優れた図録である。

ところで広告というものは多くが時とともに失われていく。チラシ広告などの一時的な印刷物(ephemera)は、図書館などでもあまり整理・保存されていない。論文「広告のパイオニア」の冒頭で園尾は、「各地の伝統的な産業とか商業を現わした看板・引札などの広告類が意外と残されていない」状況にあって、「鞆の浦は伝統的な薬種である「保命酒」に関わるものが多く残されていた」。「背景には、この伝統産業が現在も続いており、商い活動がなされているからだろう」と述べている。伝統を大切に作る古き良き港町・鞆の地でこの特別展が行われ、本書が編まれたことは、とてもすばらしい。

(収集書誌部外国資料課 中野 路子)

※1部1,000円で入手可能(送料別)。詳細は同館ウェブサイト参照。

新館長就任



長尾真館長が平成24年3月31日付けで退任し、平成24年4月1日付けで大滝則忠が15代目の国立国会図書館長に任命された。大滝館長は、昭和43年国立国会図書館入館。総務部長（平成13～平成15年）、副館長（平成15年～平成16年）を経て、平成18年から平成24年3月まで東京農業大学教授。平成23年から平成24年3月まで社団法人日本図書館協会理事。昭和19（1944）年生まれ。

第22回納本制度審議会



3月6日、東京本館において、第22回納本制度審議会が開催され、審議会委員12名および専門委員2名が出席した。審議会では、福井健策小委員長からオンライン資料*の補償に関する小委員会における調査審議の経過および中間報告が説明された。質疑の後、中間報告は原案どおり了承された。審議会は、この中間報告を基に中間答申「オンライン資料の制度的収集を行うに当たって補償すべき費用の内容について」を決定し、中山信弘会長から長尾真国立国会図書館長（当時、以下同）へ手交された。



この答申は、平成23年9月20日に開催された第21回納本制度審議会において、長尾館長から中山会長に対して「平成22年6月7日付け納本制度審議会答申「オンライン資料の収集に関する制度の在り方について」におけるオンライン資料の制度的収集を行うに当たって補償すべき費用の内容について」の諮問がなされたことを受けたものである。

答申は、オンライン資料の複製費用および利用による経済的損失に対する補償について、DRM（デジタル著作権管理）等の付与されていない無償のオンライン資料については無償とし、納入に係る手続費用としては、送付により納入した場合の記録媒体と郵送に要する最小限度の実費を補償することとし、有償のオンライン資料およびDRM等の付与されている無償のオンライン資料、非ダウンロード型資料ならびに専用端末型資料については、さらに審議を継続することとしている。

審議会および小委員会は、平成24年度も引き続き調査審議を継続し、最終報告書および最終答申をとりまとめることを目標としている。中間答申の全文、審議会に関する情報は、国立国会図書館ホームページ（<http://www.ndl.go.jp/>）>納本制度>納本制度審議会（<http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/>

deposit_council_book.html) に掲載している。

*納本制度審議会は、電磁的媒体を用いて公表される出版物で通信等により公表されるもののうち、インターネット等により利用可能となっている、図書、逐次刊行物（雑誌・新聞）にあたるものを「オンライン出版物」、オンライン出版物のうち、国立国会図書館の収集対象であるものを「オンライン資料」と定義している。

中間答申「オンライン資料の制度的収集を行うに当たって 補償すべき費用の内容について」要旨

1 オンライン資料の収集に伴う補償の内容

オンライン資料の制度的収集に伴う補償の内容としては、複製費用、利用による経済的損失、納入に係る手続費用の3つが考えられる。

2 オンライン資料の分類

有償・無償（有料・無料）、DRM等の付与の有無の2つの分類軸により、オンライン資料を次のAからDの4種類の資料群に区分する。

	無償出版物	有償出版物
DRM等なし	A群資料	B群資料
DRM等あり	D群資料	C群資料

3 オンライン資料の収集に関する補償

(1) A群資料（DRM等の付与されていない無償出版物）

複製費用及び利用による経済的損失に対する補償は無償とする。

納入に係る手続費用は、識別情報（メタデータ）の付与と送信作業については無償とし、送料については記録媒体と郵送に要する最小限度の実費を補償する。

(2) B群資料及びC群資料（有償出版物）

複製費用及び利用による経済的損失に対する補償は無償とすることが妥当と考えられる。ただし、当該資料については、パッケージ系電子出版物の補償との均衡、補償がないと十分な収集ができない可能性があることを勘案し、政策的補償やその他のインセンティブの付与を行うことも含め、さらに審議を継続する。

B群資料の納入に係る手続費用は、A群資料と同様に考えられる。他方、C群資料の納入に係る手続費用は、しばしば一出版者あたりの発行点数が多く、またDRM等が付与された状態の解消等を行うための費用に関する情報が不足しているため、さらに審議を継続する。

(3) D群資料（DRM等の付与されている無償出版物）

DRM等が付与された状態の解消等を行うための費用を除き、A群資料と同様の補償とする。

(4) 非ダウンロード型資料及び専用端末型資料の扱い

具体的な収集方法が確定していないため、現時点で補償額を算定することはできない。

(5) 代行納入の費用

具体的な代行納入の手続きが確定していないため、現時点で補償額を算定することはできない。

第8回

レファレンス協同 データベース フォーラム

2月27日、関西館で標記フォーラムを開催した。このフォーラムは、事業への認識を深めるとともに、関係者相互の情報交換、交流の場とすることを目的として毎年開催されているものである。参加者は、講師等も含めて104名であった。

国立国会図書館からの事業報告のほか、谷本達哉氏（羽衣国際大学准教授）による基調講演、神林秀樹氏（東京都立中央図書館）、寺尾隆氏（近畿大学中央図書館）、坂本幸子氏（茨城県立歴史館）による実践報告が行われた。その後、山崎博樹氏（秋田県立図書館）をコーディネータに、谷本氏、鈴木良雄氏（専門図書館協議会）、清水都氏（京都府立高等学校図書館協議会司書部会（京都府立農芸高等学校））、香西瑠衣氏（京都府立高等学校図書館協議会司書部会（京都府立西舞鶴高等学校））、島津英昌氏（（株）リクルートドクターズキャリア）をパネリストに迎えてパネルディスカッションを行い、レファレンス協同データベースの現在の課題や未来像などについて、活発な議論が行われた。

配布資料は、レファレンス協同データベース事業>フォーラム・研修会のページ（http://crd.ndl.go.jp/jp/library/forum_8.html）に掲載している。また、記録集も近日中に掲載する予定である。

おもな人事

<辞職>

平成24年3月30日付け

専門調査員 調査及び立法考査局行政法務調査室主任 末井 誠史

平成24年3月31日付け

専門調査員 調査及び立法考査局長 塚本 孝

専門調査員 調査及び立法考査局財政金融調査室主任 夜久 仁

専門調査員 調査及び立法考査局政治議会調査室主任 齋藤 憲司

<退職>

司書監 収集書誌部付 中村 規子

<異動>

※（ ）内は前職

平成24年4月1日付け

専門調査員 調査及び立法考査局長、財政金融調査室主任事務取扱

（専門調査員 調査及び立法考査局総合調査室主任） 山口 広文

専門調査員 調査及び立法考査局総合調査室主任

（国際子ども図書館長） 池本 幸雄

専門調査員 調査及び立法考査局議会官庁資料調査室主任

（利用者サービス部長） 中井 万知子

専門調査員 調査及び立法考査局政治議会調査室主任 (専門調査員 調査及び立法考査局議会官庁資料調査室主任)	吉本 紀
専門調査員 調査及び立法考査局財政金融調査室付 (専門調査員 調査及び立法考査局経済産業調査室付)	山口 和之
専門調査員 調査及び立法考査局行政法務調査室主任 (主幹 調査及び立法考査局海外立法情報調査室付)	矢部 明宏
専門調査員 調査及び立法考査局海外立法情報調査室付 (主幹 調査及び立法考査局議会官庁資料調査室付)	等 雄一郎
利用者サービス部長 (司書監 利用者サービス部付)	福士 輝美
関西館長 (関西館次長)	石川 武敏
国際子ども図書館長 (調査及び立法考査局次長)	坂田 和光
調査及び立法考査局次長 (主幹 調査及び立法考査局総合調査室付)	山口 和人
主幹 調査及び立法考査局総合調査室付 (収集書誌部副部長、収集・書誌調整課長事務取扱)	加藤 浩
収集書誌部副部長 (利用者サービス部副部長、サービス企画課長事務取扱)	豊田 透
利用者サービス部副部長、サービス企画課長事務取扱 (総務部副部長、総務課長事務取扱)	山田 敏之
総務部副部長、総務課長事務取扱 (電子情報部電子情報企画課長)	田中 久徳
主幹 調査及び立法考査局政治議会調査室付、政治議会課長事務取扱 (主幹 調査及び立法考査局総合調査室付、国会レファレンス課長事務取扱)	山田 邦夫
主幹 調査及び立法考査局財政金融調査室付、財政金融課長事務取扱 (総務部人事課長)	片山 信子
司書監 利用者サービス部付 (利用者サービス部政治史料課長)	堀内 寛雄
電子情報部副部長、電子情報企画課長事務取扱 (総務部会計課長)	佐藤 毅彦
関西館次長 (関西館総務課長)	山崎 治

お知らせ

■ 調査資料

『国による研究開発の推進』 『東日本大震災への 政策対応と諸課題』 を刊行しました



調査及び立法考査局が平成23年度に行った調査プロジェクトの成果として、3月16日に『国による研究開発の推進 大学・公的研究機関を中心に』（本編および資料編）、3月27日に『東日本大震災への政策対応と諸課題』を刊行しました。

『国による研究開発の推進』（「科学技術に関する調査プロジェクト」調査報告書）では、館外の専門家と連携し、我が国と主要国における公的資金による研究開発のメカニズムを分析し、その政策的課題を考察しています。

『東日本大震災への政策対応と諸課題』では、被災者の生活再建、被災地域の復旧・復興、原発事故への賠償と放射線対策、震災対策への財政措置について、これまでの政府等の対応と今後の課題を整理しています。

これらの報告書を含め、国立国会図書館が国政審議の参考資料として作成した資料は、ホームページで全文をご覧になれます。ご活用ください。

○国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) >国会関連情報>
『調査資料』>2012年刊行分

URL <http://www.ndl.go.jp/jp/data/publication/document/2012/index.html>



お知らせ

■ 国際子ども図書館講演会 「読者としての子どもたち —発達と読書、読書の発達—」

国際子ども図書館は、4月23日の子ども読書の日を記念して、講演会「読者としての子どもたち—発達と読書、読書の発達—」を開催します。子どもたちの身体的・精神的な発達と読書はどのように関わるか、読書する力の発達とはどういうことなのかなど、児童文学研究者の宮川健郎氏と、子どもの発達心理学をもとに読書に関する幅広い実践的活動を続ける秋田喜代美氏との対談を交えて考えていきます。入場は無料です。

○日 時 5月12日（土）14:00～16:30（予定）

○会 場 国際子ども図書館 ホール（3階）

○講 師 秋田喜代美氏（東京大学大学院教育研究科教授、教育心理学者）
宮川健郎氏（武蔵野大学教授、児童文学研究者）

○対 象 中学生以上（定員100名）

○お申込方法

4月24日（火）までに、次のいずれかの方法で、参加者1名につき1通に氏名（ふりがな）、年齢、郵便番号、住所、電話番号をご記入の上お申し込みください（必着）。申込多数の場合は抽選となります。

[往復はがき] 〒110-0007 台東区上野公園12-49

国際子ども図書館「5月12日講演会」係

（返信用はがきに返信先の郵便番号、住所、氏名をお書きください）

[電子メール] koen0512@kodomo.go.jp

（タイトル・件名欄に「5月12日講演会申込み」とお書きください）

○お問い合わせ先

国立国会図書館 国際子ども図書館 企画協力課

電話 03（3827）2053（代表）



お知らせ

■ 平成24年度の 図書館員を対象とする 研修

平成24年度に国立国会図書館が実施する、図書館員を対象とする研修の予定をお知らせします。

本年度実施する研修は、いずれも前回実施時に高い評価を受けた研修です。皆様からのお申込みをお待ちしています。

○本年度の研修について

- ・資料保存研修：資料保存に関する基礎的な技術の習得を目指します。
- ・音楽資料・情報担当者セミナー：音楽資料・情報担当者の育成に寄与することを目的とした講義とパネルディスカッションを行う予定です。
- ・科学技術情報研修：科学技術分野の専門資料群の紹介、主題情報の調べ方について、講義と演習を行う予定です。
- ・資料デジタル化研修：デジタルアーカイブの企画・事業の流れやデジタル化の手法等について、講義等を行う予定です。
- ・レファレンス研修：レファレンスの効果的な方法と課題解決への考え方について、講義と演習を行う予定です。
- ・アジア情報研修：アジアに関する情報資源について基礎的な知識の習得を目指します。
- ・児童文学連続講座：総合テーマを「イギリスの児童文学：社会文化的視点からみる300年」とする予定です。
- ・障害者サービス担当職員向け講座：図書館における障害者サービスの基礎的な知識の習得を目指します。
- ・法令・議会・官庁資料研修：法令、議会、官庁資料の特徴と調べ方について、講義と演習を行う予定です。
- ・日本古典籍講習会：日本の古典籍の目録および環境の整備を図るために、書誌学の専門知識や整理方法の技術の修得を目指します。

○各研修の詳細・申込方法

各研修の実施日程や科目の詳細・申込方法などについては、決まり次第、国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) > 図書館員の方へ > 図書館員の研修 (<http://www.ndl.go.jp/jp/library/training/index.html>) に掲載します。メールマガジン『図書館協力ニュース』でも、研修の案内を随時お知らせします。未登録の図書館、関心をおもちの図書館員の方はぜひご登録ください。(図書館員の方へ > 図書館へのお知らせ > メールマガジン『図書館協力ニュース』(http://www.ndl.go.jp/jp/library/library_news_toroku.html) から登録できます)。

お知らせ

※このほか、公共図書館、大学図書館などでレファレンス業務や資料保存業務に関する研修を実施する際に、職員を講師として派遣します。また、インターネットを通じて受講できる遠隔研修を実施します。詳細は、ホームページ「図書館員の研修」などでお知らせします。

平成24年度研修一覧

研修名	実施時期（予定）／会場	対象および定員
資料保存研修	平成24年7月（2日間） ／東京本館	公共図書館職員、大学図書館職員および専門図書館職員。42名。
音楽資料・情報担当者セミナー	平成24年9月（2日間） ／東京本館	音楽図書館、博物館、資料館等で、音楽資料・情報を日常的に扱う者。20名。
科学技術情報研修	平成24年9月（2日間） ／関西館	公共図書館職員、大学図書館職員および専門図書館職員。30名。
資料デジタル化研修	平成24年10月（2日間） ／関西館	主に公共図書館等でデジタルアーカイブ業務またはサービスに携わる者。30名。
レファレンス研修	平成24年11月（2日間） ／東京本館	公共図書館職員、大学図書館職員および専門図書館職員で、現在レファレンス業務を担当する者。レファレンス業務経験年数5年以上。24名。
アジア情報研修	平成24年11月（1日間） ／関西館	公共図書館職員、大学図書館職員および専門図書館職員等。30名。
児童文学連続講座 —当館所蔵資料を使って	平成24年11月（2日間） ／国際子ども図書館	現在、図書館等において児童サービスに従事する者。60名。
障害者サービス担当職員向け講座 (日本図書館協会と共催)	平成24年第3四半期 (2日間)／関西館	公共図書館職員および大学図書館職員等。20名。
法令・議会・官庁資料研修	平成24年12月（2日間） ／東京本館	公共図書館職員、大学図書館職員および専門図書館職員等。30名。
日本古典籍講習会 (国文学研究資料館と共催)	平成25年1月（3日間） ／国文学研究資料館・東京本館	日本の古典籍を所蔵する機関の職員で、現在古典籍を扱っている者。経験年数おおむね3年以内。32名。

次の研修は、各事業の参加館を対象として実施するものです。

レファレンス協同データベース事業担当者研修会	平成24年6月または7月 ／東京本館・関西館 (各1日間)	レファレンス協同データベース事業参加館の実務担当者。各30名程度。
国立国会図書館総合目録ネットワーク研修会	未定／関西館（1日間）	都道府県立および政令指定都市立図書館中央館における国立国会図書館総合目録ネットワークについての研修担当者等。20名程度。

お知らせ

■ 新刊案内

国立国会図書館の 編集・刊行物



外国の立法 立法情報・翻訳・解説 第251号 A4 246頁

季刊 1,890円 発売 日本図書館協会 (ISBN 978-4-87582-731-3)

<主要立法(翻訳・解説)>

特集 大規模災害対策法制

- ・アメリカの連邦における災害対策法制
- ・英連邦諸国(イギリス、ニュージーランド、カナダ)の緊急事態法制—大災害時の緊急権行使と緊急事態管理の仕組み—
- ・フランスの大規模災害対策法制—民間安全保障に基づくORSEC計画—
- ・ドイツの非常事態法制—連邦と州による防災のための協力体制—
- ・ロシアにおける非常事態法制の概要と非常事態対処体制
- ・韓国の災害法制
- ・中国における大規模自然災害への対応—突発事件対応法と応急対策計画を中心に—
- ・タイにおける防災政策と「仏暦2550年防災及び減災法」

レファレンス 734号 A4 82頁 月刊 1,050円 発売 日本図書館協会

- ・非正規労働の現状と課題
- ・日韓防衛協力をめぐる動向と展望
- ・諸外国における動物取扱業をめぐる法制
- ・日米における官民給与差をめぐる議論

カレントアウェアネス 311号 A4 24頁 季刊 420円 発売 日本図書館協会

- ・国立国会図書館サーチとディスカバリインタフェース
- ・引用分析による蔵書評価
- ・ライデン大学図書館特別コレクション室における研究促進とデジタル化

<動向レビュー>

- ・欧州の図書館におけるディスレクシアの人々を対象にしたサービス
- ・RDA: ウェブの世界に乗り出す目録規則(解説)
- ・『RDA』: 図書館をセマンティック・ウェブに適したものに

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14 電話 03(3523)0812

C O N T E N T S

- 02 <Book of the month - from NDL collections>
Kawamura Kiyoo : sakuhin to sono jinbutsu
 a book written in praise of a painter
- 04 Half a century of the oral history of politics in Japan
- 12 Buildings of the National Diet Library : taking a retrospective glance
- 18 Linking the Diet (parliament) with the public : Legislative information on the NDL website
- 21 Finding aids : how to use the NDL Search and the NDL-OPAC
- 22 Strolling in the forest of books (9) Japanese culture that fascinated the British
- 17 <Tidbits of information on NDL>
 Quiet dedication for recruitment activities
- 27 <Books not commercially available>
 ○ *Setouchi no minatomachi yukari no kanban hikifudaten : yuniku de kokkeina kōkoku bunka : nisenjū Heisei nijūni nen tokubetsuten*
- 28 <NDL News>
 ○ New Librarian
 ○ 22nd meeting of the Legal Deposit System Council
 ○ 8th forum on the Collaborative Reference Database Project
 ○ Changes in personnel
- 32 <Announcements>
 ○ Research materials series *State promotion of research and development : support for higher education institutions and public research institutions and Policy response to the Great East Japan Earthquake and problems* published
 ○ Lecture at the International Library of Children's Literature "Children as readers - development and reading, development of reading"
 ○ Training programs for librarians in FY2012
 ○ Book notice - Publications from NDL

国立国会図書館月報

平成24年4月号 (No.613)

平成24年4月20日発行 定価525円
(本体500円)

発行所 国立国会図書館
 編集責任者 田中久徳
 〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
 電話 03(3581)2331(代表)
 F A X 03(3597)5617
 E-mail geppo@ndl.go.jp

発売 社団法人日本図書館協会
 〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
 電話 03(3523)0812(販売)
 F A X 03(3523)0842
 E-mail hanbai@jla.or.jp

印刷所 株式会社正文社印刷所

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) > 「刊行物」 > 「国立国会図書館月報」でご覧いただけます。



Tree Pæony (牡丹)
Some Japanese flowers by K. Ogawa, vol. 2.
東京 小川一眞 明治28 (1895) 年 全2冊
<請求記号 Sd-31 >

国立国会図書館月報

平成24年4月20日発行 (毎月1回20日発行)
(4月号通巻613号)

発売：社団法人 日本図書館協会 定価 525 円 (本体 500 円)